

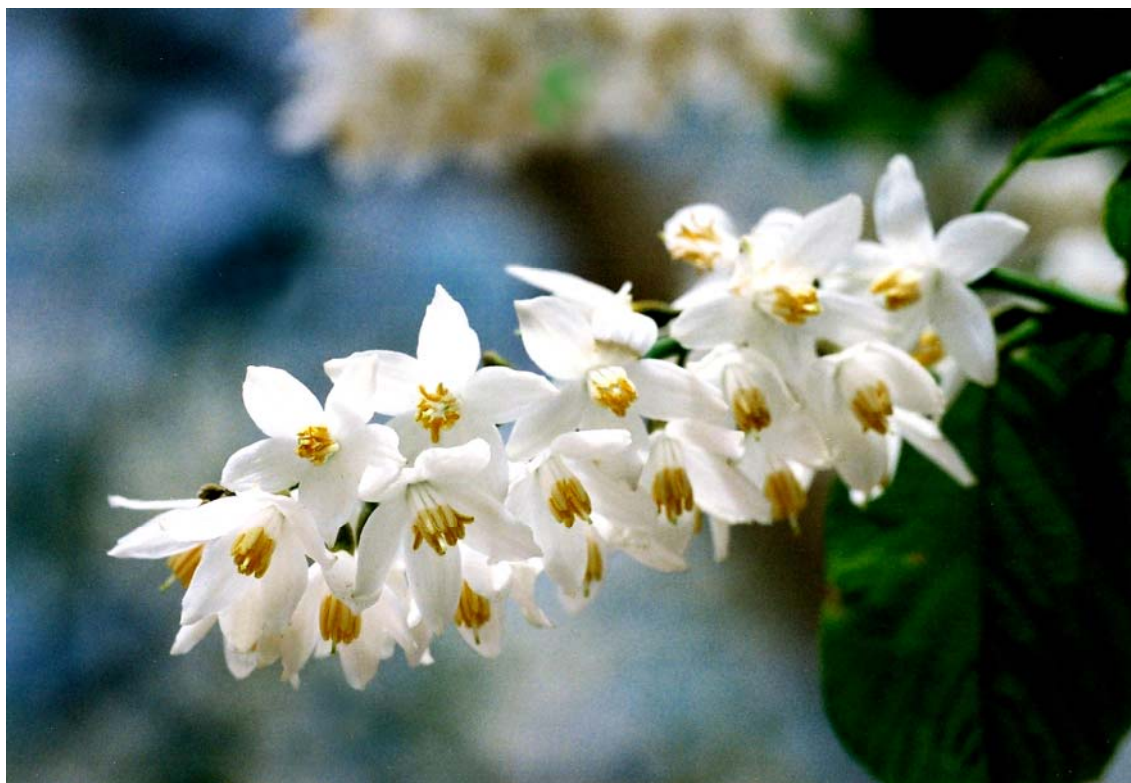
9) ハクウンボク＝白雲木

ハクウンボクもエゴノキ科の落葉高木で、高さは15mに達する。北海道から九州にいたる山地に自生し、5～6月頃10～20cmの総状花序の花房をつける。白い釣鐘状の花は深く5裂し、花茎が長く下向きに咲く。葉は大きく時には20cmにも及び、葉脈の部分がへこみ、葉縁には浅く切れ込む鋸歯がある。白雲木の由来は固まって咲く花房を白い雲に例えたものである。秋になると長さ15mmぐらいの卵円形の先が尖った槲果(サクカ)を結び、種子を一つ含む。種子には脂肪分を多く含んでおり昔は蝋燭を作る材料にした。花の時は確かに白雲木というにふさわしいほど見事な白い花をつけ、そのさまは女王の風格がある。このため静岡県ではオンナカシワとも呼ばれる。この他にもオオバヂシャ、ハビロ、オオガメノキなどともいい、中国では『玉鈴花』と呼び、釣鐘状の花を鈴に見立てている。学名は『*Styrax obassia*』で、属名は安息香をとる樹木の古代ギリシャ名、種小辞は和名のオオバヂシャに由来する。白雲木は葉の大きいことを除くとエゴノキに似ている。材は緻密で固くエゴノキと同様に傘の轆轤、彫刻の材、独楽、こけしなどにする。また安息香を多く含み、その原料となる。庭園樹としても植えられるものの、大きくなるので家庭では育てにくい。

繁殖は挿し木か実生である。山取りをすることも不可能ではないが、野生のものは直根ばかりで鬚根がないことが多い。これは自然の状態では、とにかく根は幹の外へ外へと張って行く結果、根もと付近では太い棒根しかなくなってしまふからである。このため移植するには『根回し』という作業が大事である。これは太い根を切ることによって細い鬚根を出させる大事な作業で、数年かけて少しずつ行なうとうまく行く。まず最初に晩秋か早春、全周の1/3ほどをシャベルを深く入れて根切りし、翌年には更に1/3、これを三年繰り返す。この際重要なことはシャベルを入れる際、幹を背にして行なうことである。極端に言えば根切りによって現れた根の形成層が、天を見上げるぐらいに根の先が鋭角になるのが良い。こうしておくとなら形成層に肉が盛り上がり発根するとき、鬚根は地表に向かって伸び、移植の際に深く掘り下げる必要がなくなるからである。これを逆にすると形成層も下を向いた格好になるので、鬚根は下に向かって伸び、移植の際にまた根を切ってしまう恐れがあるというわけである。そして4年が過ぎたら根回しをした外側、20～30cmの所にシャベルを入れて移植する。この場合は幹に向かってシャベルを入れて差し支えない。通常の植物は幹や枝であろうと、根であろうと、切られた部分から多くの小枝や鬚根を出して、新しい環境に適応しようとする。根回しはこうした植物の特徴をうまく利用して移植する、人間の知恵なのである。そしてもう一つ大事なことは、根と枝のバランスである。根を切ったら必ずそれに見合った枝を払ってあげる必要がある。概ね木というものは枝葉と同じぐらいの根を張っているといわれ、根が切られたら枝も切る、枝が切られたら根も切るとよい。また政界などでよくいう「根回し」の語源は、ここから発生したものである。



都内でハクウンボクを見ることはほとんどない。大きくなるから敬遠してあまり植える人がいないからだ。これはセラスティンホテルの玄関先で咲いたハクウンボクである(東京都港区)。



ハクウンボクの花。これは山野に自生していたものである(長野県白馬村)。



都心では珍しいセラスティンホテルの白雲木、2本あって日当たりのよいこちらから開花する。



セラスティンホテルの玄関先に植えられている大きな白雲木の木(東京都港区)。

[目次に戻る](#)